

大学が、その後の塔、といわれ、社会とかわりなく存在してきたのは、はるか過去の話。大学・短大への進学率が四〇%を超え、十八歳人口の減少で五〇%の割合に乗るのも時間の問題となった今、大学は激しい変革の波に洗われている。二十一世紀に向けた新しい大学とは何か、各大学の模索が始まった。

# キャンパス探訪

◆大学の顔に  
「価値システム専攻」(略称バルデス・VALEDS)という聞き慣れない学科が今

春、東工大(木村孟学長)大学院に開設された。「社会のトップに立つリーダーに必要な資質(価値システム)と能力(意思決定能力)を身につけるための大学院(説明会資料)だ。同時に「人間行動システム専攻」学科も新設された。共に、理工系と人文社会系の学問を融合させた、世界でも初めての領域で、理工系大として、米のMIT(マサ

チューセツツ工科大学)と並んで世界に知られる同大の新しい顔に、と期待が集まっている。バルデスには、ユニークな音楽論で知られる細川周平氏を助教授に起用、文化人類学の上田純行助教授を愛媛大から招くなどスタッフの充

◆追い風  
「このときは、文明科学部

化、学際化が進む中で、より柔軟な大学教育を推し進めようという狙いで出された。具体的には一般教育と専門教育の科目区分は廃止し、各大学で自由にカリキュラムを編成できるようにした。

以後、各大学は教養部の廃止ないし改組、またカリキュラムを改革するなど、大学改革が活発化。新学科設置とい

突にも力を入れている。この新学科が生まれるまでには、長い時間がかかった。平成元年に出された「東工大の将来計画」という報告書がある。この中で、従来の学問の研究だけでなく、「人間社会と調和する社会技術」を強調した新学科の開設が、提案された。

「環境問題への関心が高まってきた時期で、便利さだけ

や情報学部などが提案された。が、機が熟さず、実現しなかった。外的な要因としては、行政側が新学科の必要性を感じていなかったことが挙げられる。それが、一九九一年に出された『設置基準の大綱化』が追い風となった。

「大綱化」とは、大学審議会(の答申)を指す。「大学教育の改善」(大学院の整備充実)などを柱としたもので、国際

の結果がバルデスとなって結実した。新学科創設の狙いは、これまでエリートの代名詞だった東大法学部卒を超える、リーダーの養成だ。

「エイズ問題で厚生大臣として自己覚ましい指導力を発揮した菅直人氏は、東工大出身。評論家大前研一氏も東工大大学院卒。このような理数系の合理的な思考ができて、

来日して研究する道を閉ざしてゐる。日本の研究職を外国人に開放せよーこれが、日本の研究をトップ

レヴェルにもつていく決め手、ではないまでも、絶対の必要条件なのである。

二十一世紀を迎える準備。「私が考えていること」『潮』通巻第456号 1997.2.1.発行 pp. 111~113

潮出版社 1996-48

## 「研究開国」で科学技術立国めざせ



橋爪大三郎  
一九四八年生まれ、東京工業大学教授。一九八八年生まれ、専攻分野は社会学。橋爪氏は、設立した言語派社会学の創立をめぐり、著書に『除としての社会学』など。

アメリカは今でこそ、押しも押されぬ科学技術立国だが、昔はそうでもなかった。ヒトラーが政権をとった一九三三年までのノーベル賞の受賞者数は、文学・平和賞を除くと、ドイツが断トツの一位で三人。これにイギリス一四人、フランス一人と続き、アメリカは六人にすぎない。経済は当時すでに世界一だったが、科学技術はまだ二流だった。

では、世界各国からやってきた学者で国際的な研究チームを組むのが常識だ。大学や研究機関のポストも、外国人に平等に開放する。さもなくば、外国人がやる気を失ったり、帰国したりして、レヴェルが下がってしまうのだ。そのために競争が厳しくなると困ると、国内の学者が文句を言うとしても、それは国内の学者が悪いのである。

浮き彫りになった問題点はいろいろある。ビザの問題。言葉の問題。住居の問題。物価の問題。習慣の問題。そしてもちろん、外国人に開かれていた日本の研究ポストが、あまりに少ないこと。こうした日本の現状は、アメリカやヨーロッパの研究機関が外国人を原則的に一切差別していないのと比べると、あまりに違いすぎる。そして、外国の研究者が

今年執筆予定 『出版ニュース』通巻1755号 1997.1.1.発行 pp.32 出版ニュース社



橋爪大三郎  
社会学  
昨年は大学の事務作業が集中して、仕事がかたくなかった。今年も宿題の、『研究開国』(編著、富士通ブックス)、『こんなに困った北朝鮮』(仮題、メタローグ)、『言語派社会学の原理』(仮題)ほかを片付けて行きたい。私家版で「Cui Jian: A Chinese Rock'n Roll Star」を翻訳出版予定。

### 新 経 済 年 報

1996年(平成8年)7月7日(日曜日)

おまけ

日本中を揺るがせたオウム真理教事件をめぐり、活発な論議が繰り広げられている。地下鉄サリン事件から教団幹部の逮捕にいたる時期、風俗的な話題が世の関心を呼んだ。その狂騒が冷めた後、現代日本の精神状況を解説する知的な格闘が静かに始まっている。

□ □ □

「オウムが、あるいはオウムのものが、私自身もそうでありうる可能性を示している、という自覚なしには、このようなものを書くことはなかっただろう。」一九五八年生まれの社会学者・大沢真幸氏は近刊の『虚構の時代の果て』(ちくま新書)にこう記した。

オウムが抱いていたハルマゲドン思想のくだらなさを嘲笑(ちやうしやう)するのはたやすい。だが、その「くだらなさ」が特殊でない多くの人の行動を導いてしまった根拠にまで及ぶかのほれば、社会学の分析に大切な意味が出てくる。



これまで指摘されている通り、大沢氏もオウムの思想が多かったのに対し、オ

にさかのほり、教団へと直一エイジのムーブメントに線的に発展する時間の流れを分析する。そして、その近代的論理を戦後日本に当てはめる。社会変革の理想が否定された後、なほ理想の純化を目指せば、論理的に理想は自己否定され、虚構の肯定を拒否。それが「心配をかける」という形で現実の否定、世界の破壊へ働きかけを始める。ところが、やがて人間関係の不平等をもたらした。その

風社刊『オウムと近代国家』。子供は親から「自由にしていい」といふ指示を拒否する。新選組(新選組)とこれを許さないという禁断を同時に示される。精神的に分裂する。専門用語でいうとブルバインド状況がアメリカと日本の間にあり、オウムもまた、この戦後の精神構造の中にある。橋爪氏は指摘する。教団が極端な反米主義だったことは記憶に新しい。

□ □ □

先に行われた「宗教と社会」学会では、オウムを生んだ神秘主義などの潮流が事件の後、衰退することなく、拡大していると報告さ

## 「オウム」生む社会を解説 戦後日本の精神構造と連関



オウムの場合は不幸が何もないという空虚感が入信動機となっていた。サブカルチャーのパロディや空虚さの克服が現象の全容定へと暴走していったのはなぜなのか。

大沢氏は「近代」のルーツを古代エジプトの「神教」に求め、オウム真理教を論じる著作物の刊行が相次いでいる。

それ自体はむき出しの口内肉から「自分探し」が始まった。若者たちの身体やジグザグだが、そこに冷戦の崩壊や自殺本流に見る「自己探しの流れ」という二重の無意味化といった時代相を重ねていく。

評論家の芹沢俊介氏は「イエスの方舟をほじめ、出する過程だった」という。日本の新しい宗教に注目してきた。近著『オウム現象の解読』(筑摩書房)本人は自らの意志で体制を対する徹底した寛容と、象徴的でないコンプレックスを突然変異ではなく、ニュースを持ち続けたという(南。文化部 内田洋一

# 日本人は闘争心を取り戻せ

橋爪大三郎

東京工業大学教授



日本人はいつの間にか、自立心、闘争心をなくしたのではない。それは多分、教育の結果である。日本の高校生や、大学生や、大卒生をみていてそう思う。おとなしく言われた通りに、与えられた課題をこなし、受験を

通り抜け、特にこれといった疑問や不満をのべてもいない。話をしてみると、知力とはもかく、人間としてのゆきを感じる。自分がこの社会を支えているという責任感や、明日何が起きるか知れないという切迫感がまるでないのだ。

これがアメリカならどうだろう。一流大学の学生ならば、猛烈な闘志をむき出しにしてがむしゃらに勉強する。いたるところに競争があり、ちよつとよいポストに就いたからといってうかうかできない。部下はすぐ引き抜かれたり、新しい会社を興してライバルになったりする。ヨーロッパでも、社会を指導しようというほどの人びとの、深い教養とタフで強靱な仕事ぶりは、驚嘆に値する。

に官僚組織を形成したが、あくまでも自己武装した個人が単位になっている。腰に差した一本の刀が、その象徴である。武士は裁判権もっており、原則から言えば、その場で相手を「成敗」してもかまわない。浪人して組織を離れても、武士の身分は保証されている。だから幕末に体制が機能しなくなると、そこを離れて武装勢力闘争を行うことが可能だった。

そんな国々を相手に、日本がなんとかやって来られたのは、企業にすべてを集中したから。個人の自立や家族と過ごす時間は犠牲にして、コストや品質の競争に明け暮れた。そのため社会は薄っぺらに、個人は負担になった。集団にいるあいだは団結を誇る日本人だが、一人になるとたんにひ弱になる。

武士は独立国家のようなものだから、厳しいセルフ・コントロール、自己倫理が要求される。幕末から少なくとも明治の中ごろまでは、こうした武士の倫理が生きていた。大部分の日本人は、武士出身でなかったが、指導者はかくあるべきという姿を、武士の生き方として思い浮かべた。

幕末から明治にかけての激動の時代、多くの若い日本人が命をかけて、時代を切り開いた。彼らは所属する集団(藩)を飛び出し、身分の保証も定取もなく、自らの信念と覚悟だけを頼りに、維新の大業をなした。先見性と気骨と勇気を兼ねそなえ、何があろうと動じない個人がまずあった。体制が彼らをこしらえたのではない。彼らが体制をこしらえたのである。

武士があつという間に没落したのは、彼らの地位が近代の科学的知識と無関係だったからである。彼らは、封建所領を基盤にした武装闘争者にすぎなかった。儒教の知識さえ、彼らには不要だった。彼らは内乱を克服し、「憲法制定権力」としての役割を果たし終えたあと、自ら設立した国家によって、その存在を解除されていく。西南戦争を最後に、武士的なものは社会の表面から消えていった。

(維新の志士のなかには、武士でなく農民や町人身分の者も多かったが、武士的信条である尊皇思想を共通項に結びついていた。武士には武士の行動規範があり、それが変革を可能にした。

国家よりも、個人の实在のほうを信じる。自分の信念を、生命をかけて守り通す。そうした武士の個人主義を、富国強兵の近代化の代償としてあつさり捨て去ったツケが、いま回ってきた。たとえいじめは、強者であることの自己倫理・人間を鍛えあげる場が必要だ。

このことは、同じ時期に欧米と接触して植民地化してしまった中国(清朝)と比較してみるとよくわかる。清朝の官僚は、儒教の伝統そのままの文官たちだった。中国の官僚は、もともと君主の家内奴隸が起源で、皇帝には絶対服従である。そして儒教では、過去が正統性の規準である。過去を否定し現政府に反対して、官僚たちが武器をとってたち上ることなど考えられない。だが、儒教の日本の変種である尊皇思想では、それが可能だった。その担い手が武士だったからである。

その場は市場での競争ではないか。受験は、集団(学校や企業)に所属するための競争、競争にさらされないための競争だった。そんな個人を集団から引き剥がし、市場での競争にさらす。かつて白刃の下をくぐり抜けた武士たちを先祖にもつ日本人に、それができないわけではない。日本人よ、闘争心を取り戻せ、と私は言いたい。

武士は、もともと正規の軍人でなく、勝手に武装した私人だった。それが、貴族のガードマンをしているうちに実力を蓄え、統治権を奪取していった。次第

# なぜ若者は、 成熟するのがむずかしいか



橋爪大三郎

「最近の若い者は……」という老人の繰り返いは、大昔から繰り返されてきたという。自分の若かったころを棚に上げているところがおかしい。

いっぽう若者は、こんなことは言わない。昔の老人は死に絶えてしまい、自分はまだ老人になっていない。今生きている老人しか知らないのだから。もし比較ができるのなら、「最近の老人は……」とぶつぶつ文句を言うこともできよう。不公平である。

繰り返しがあつたら、そこに法則性もあるはず。若者と、彼らを取り巻く社会のあり方について、考えてみよう。

## 延々と続く青年時代

人間はだんだん年をとり、最後は死んでしまふ。しかもそのことを、意識しながら生きている。これがまず、動物との違いである。つぎに人間は、家族を営む。家族は結婚や血縁といった安定した関係から出来ていて、社会のなかの小さな単位をこしらえる。人間は幼いあいだ、自分一人で生きていけない。また、言語をはじめ、さまざまな知識を習得しなければいけない。そのため、生まれてからかなり大きくなるまで、家族のもとして過ごすことになる。これも、人間だけの特徴である。

というわけで、人間の一生を、三つの時期に区分できるだろう。まず、生まれてから家族のもとを去る（結婚する）までの時期。つぎに、自分の家族をつくらせて、子供を育てる時期。最後に、子供を育て終わってから死ぬまでの時期。子供／大人／老人、の三段階である。

近代産業が未発達な伝統社会では、この三つの段階がきっちり踏まれるケースが多かった。そうすると、人間は一足飛びに、子供から大人、大人から老人になつてしまふ。不自然なようだが、そこはしきたりの力でカバーする。特に、子供が大人になるための儀礼を成人式（イニシエーション）と言い、ライオンを一人頭自力で仕留めさせるとか、帯刀を許し髪型や服装も変

えるとか、試練を課し変身を演出して、若者の劇的な生まれ変わりをうながした。

ところで近代化が進むと、こうした成人式は影が薄くなる。そして、子供と大人の境界はだんだん曖昧になり、延々と続く「青年時代」がそれにとって代わるのである。

こうした変化は学校教育の普及に関係がある。近代産業を支えるのは、官僚や工員、エンジニア、教師、事務員といった、近代的なセクターで働く人びとだ。彼らは教室で近代的な知識を身につけ、書物を通じてつねに知識を更新していく。遊ぶでもなく働いても長い時間を、若者は過ごすことになる。

若者はまず、身体が大きくなる。つぎに、知識を身につける。そのあとで、社会に出ていく（就職する）。凶体はでかいが、とりたてて責任はない。世の中のことは情報としてわかっているが、実際に体験しているわけではない。そんな中途半端な状態が、かれこれ十数年前後も続くのである。

印刷術が発明され、本というメディアが普及してから、情報が安価に行き渡るようになった。実社会に出ていない若者でも、本なら手が届く。本ばかり読みすぎて頭でっかちになるのは、若者と相場が決まっていた。

電波メディアとなると、もっと安価だ。テレビの登場以降、若者は情報の洪水に押し流されている。あふれる情報は、実社会とちがったもうひとつの現実をつくり出し、若者をそこに閉じ込める。情報の真偽を検証する手段を持たない若者は、そこから脱出することができない。

こんな状況に置かれれば、誰だって精神のバランスを保つのに苦労する。自分の手に負えない情報は、切り捨てるしかない。自分に関係がないと割り切つて、興味を持てる情報のなかに閉じこもる。オタク状態である。これも、やむをえない自己防衛なのだ。

東京・千代田区



ところがそのいっぽう、情報化の波は、社会そのものも巻きこんでしまった。実社会／情報の、区別が消え失せつた。社会は情報とともに、目まぐるしく変化していく。大人たちが実社会の「経験」に、安住しているわけにはいけなくなった。若者と同じ悩みを誰もが悩みはじめた。

パソコン教室に通い、WINDOWSと格闘。リストラにあえぐ中高年を横目に、若者の悩みはいつそう深まる。モデルとすべき大人がいらない。よりどころとすべき社会規範が視えない。いつまでたつても現実とぶつからない。成人式の祝祭とは対極の、平坦で散文的な日常が続く。永遠に若者でいなければならぬとすれば、自分は一体若者だろうか。

社会の、体験の構造が変化した。情報を問に挟んで現実と接する（あるいは、情報そのものが現実である）とすれば、若者は最初から、社会のただ中にいると言えないか。マス

メディアや雑誌のどこか外側に、社会が実在するわけではないのだから。

こういう時代にふさわしい成熟のかたち。それは、手応えのない現実（情報）のなかに現実（体験）を獲得するスタンスを身につけることである。

若者であることと、実年齢とはますます関連がなくなっている。いたずらに歳を重ね、相変わらず情報のもやに首を突っ込んだままの中年。すばやくネットワークをかい潜り、必要なものを手に入れる少年。若者の利点は時間があること。そして、失敗のコストが小さいこと。そうした利点のあるうちに、情報とつきあう術を体得すべきなのである。

成熟を恐れないこと。そして、自分が成熟していく術を知っていること。そうした若者が、いまの時代にふさわしい。そして、どうすれば成熟できるかは、情報をいくら検索してもどこにも書いてないのである。

（はしづめだいさぶろう 社会学）

# 清算し切れぬ過去

橋爪 大三郎

## 楊克林編著 『中国文化大革命博物館』(全2巻) にふれて



北京市革命委員会 (1967年4月20日) 一本書から

いちばんの方法は、いち早く造反派に加わり、造反派であることを証明するために、誰かを批判し打倒することである。誰かを批判することのための材料など、いくらでもみつかった。どんなに人間性に外れた扱いでも、階級の敵にはむしろさわいといわれた。文革中に殺された人びとは、数百万人ともそれ以上とも言われる。その責任を問われ始めれば、収拾のつかない混乱になる。中国大陸で、文化大革命

命だった。

(2)文化大革命は、冷戦構造(米ソの覇権体制)に対する異議申し立てだった。それは、中国のナショナリズムが、毛沢東のカリスマへの帰依(個人崇拜)というかたちをとって噴出したものである。

(3)文化大革命は、党よりも毛沢東の権威のほうが優越したからこそ可能となったが、紅衛兵は党と違って指揮系統をもたなかったため、日常化できず、下放に

がめるにつけても、驚くべきことに思われる。その秘密を解くひとつの鍵として、档案制度に注目すべきではないか。

ロシア共産党が秘密警察によって維持されていたとすれば、中国共産党を支えたのは個人档案(ごうあん)制度である。この制度は、清朝にさかのぼるとい

く、この書類の特徴は、①本人は、自分の档案を見る事ができない、しかし、②組織のトップは部下の档案を見ることができ、そこに何か書き加えることもできる、というものである。要するに、居ながらにして部下の思想的傾向や経歴の汚点、家族の状況、プライバシーなどが把握できるのだ。数年前、档案制度は廃止になったけれども、安心はできない。用済みになった档案などは、公文書センターのよう

なところ(档案館)に集めて保管されており、誰かが閲覧するかもしれないからである。国民党を追い出して政権を握った中国共産党は、スパイや国民党の残党に目を光らせる必要があった。共産党の幹部にしても、兄弟や親戚が国民党だったり、親が地主や資本家だったりする。そうしたデータを残らず記録し、集中管理するシステムが档案制度だ。中国では党や軍隊に限らず、あらゆる組織や人間が、官僚制の「級別」によって序列づけられている。中国の、共産党・官僚制・档案制

## 秘密を解く鍵は档案制度に

### 何の実績もない人間がなぜ権力を奪取できたか

文化大革命の話題になるように、未解決の近過去の、問題として、文革は中国の、人びとのわたがかりとなっている。

なぜなのか? その理由は容易に想像がつくだろう。文革は、中国共産党の組織とひと握りの人びとに、なすりつけて、うやむやにする以外にないのだ。

よって社会の中枢から一掃されてしまった。何の実績もない中高生、大学生たちが、いとやすやすと幹部をつるし上げ、権力を奪取できたのは、なぜか? 今回『中国文化大革命博物館』に収録された生々しい当時の写真をな

档案とは、履歴書か病院のカルテのようなもので、個人データの書類の束が档案袋という袋に入っており、一人ひとりに一生ついて回る。学校を卒業すると、職場に成績表のほかが入った档案が届き、以後、だんだんなかみが増えてい

ないまま火にくべたなら、ほっと安堵する人びとが多いただろう。中国の民主主義が、そこから始まるかもしれない。文化大革命の研究がでなくなっても、(昔こんな失敗をした、日本に留学したことがある、……)をちょっと誰かに洩らしてやればよいのだ。つぎの日は、「大字報」が貼り出され、紅衛兵がわたと押しつけてくる。文革中になにが起こったか、その記録は、膨大な档案のなかに細もたず記されている。これを系統的に研究すれば、文化大革命の全貌が白日のもとにさらされるだろう。そんな日がくるのだろうか。

一九八〇年代半ば、中国の作家・巴金は、「歴史の悲劇を再び繰り返さないため」に、「文化大革命博物館」の建設を呼びかけた。巴金の訴えは多くの賛同者を見たが、当局はこれを無視しつづけ、いまだに博物館は日の目を見ていない。昨年暮れに香港で出版された楊克林編著『中国文化大革命博物館(全2巻)』は、その構想を紙上で実現したものである。柏書房から翻訳が刊行されたのを機会に、橋爪大三郎氏に文化大革命についての感想を寄せ

てもらった。(編集部)

と、中国の人びとは、ちょっとビクッとすると、いろいろなことがあったけれど、いまさらほじくり返しても仕方ないでしよう、というふうに対応する。毛沢東が一九六六年に「プロレタリア文化大革命」を發動してからまる三〇年。一九七六年に毛沢東が死去し、文革が収束に向かってからも、まる二〇年。それだけの時が流れた。その間、鄧小平の改革開放政策が実を結び、中国は面目一新した。にもかかわらず、文革をひとつの歴史的事実として見せず、率直な学問的検討の対象にすることが、まだできないらしい。ちょうど日本の戦争責任の

全面否定すれば、中国共産党の正しさも否定されてしまう。共産党の政権を維持していく以上、毛沢東の権威を傷つけてはならない。となれば、文革がどうやってひき起こされたかという責任問題を、四人組などひと握りの人びとに、なすりつけて、うやむやにする以外にないのだ。

毛沢東ばかりでない。当時誰が誰かを批判し、誰かを打倒し、誰かを裏切るのをえなかった。そうしなければ、身を守ることができなかった。身を守る

(1)文化大革命は、党に指導されるはずの大衆が、党を破壊するという、マルクス・レーニン主義の原則に反する(「革命は必ずしも」)

た生々しい当時の写真をな

た生々しい当時の写真をな

「歴史の悲劇を繰り返してはならない」と、一九八六年に『中国文化大革命博物館』の設立を呼びかけたのは、大作家の巴金である。それから十年、香港の出版社が昨年暮れ、その構想を借りて、書物のかたちで出版した。編者の楊克林氏は、文革中に青年時代を上海、四川で過ごし、この書物に自分の半生の決着をつけようという意味で取り組んだという。本書で特に感動的なのは、文革の非道な弾圧のなかで、信念と人間の尊厳を買き、死を恐れずたおれていった人びとも多くいたことだ(第11章)。その事実、この書物同様のずしりと重い手応えを感じる。個人が購めるには少し高価かもしれない。だからこそ、なるべく多くの図書館に、蔵書としてそなえてもらいたいものである。(はしづめ・大教授・社会学専攻)



樋口裕子・望月暢子訳 A4判変型・計647頁・揃38000円 柏書房

